

〔紹介〕

飯倉洋一著『上田秋成―絆としての文芸』

尾崎千佳

飯倉洋一氏著『上田秋成―絆としての文芸』は、一般読者を対象とした大阪大学出版会の選書「阪大リーブル」の三九冊目として刊行された。二〇一〇年に京都国立博物館で開催された「没後二〇〇年記念 上田秋成」展において実務を担当し、数多くの秋成遺墨に接した著者が、表現者・上田秋成の全像を簡明軽快に説きあかす。

本論の章立ては次のとおりである。

序 章 新たな秋成像を求めて

第一章 秋成の人生を読む

第二章 歌文で繋がる―大坂で知り合った人々

第三章 歌文で親しむ―京都で交わった人々

第四章 秋成が感謝する神々

第五章 『雨月物語』『春雨物語』を読み直す

序章では、『雨月物語』作者として広く知られる秋成の文業の中心が、小説ではなく、和歌や和文であったことを指摘し、それらが秋成の肉筆資料として今日に伝わることの意義を強調する。秋成の自筆資料は千点を越えるというが、かく膨大に残された秋成の和歌や和文は、それぞれ、ある特定の読者に向けて、あたかも手紙を認

めるかのように製作されたものだった。本書の中核を成すのは第二章から第四章にかかる三章で、秋成の和歌・和文を縦横に引用しつつ、その交友の広がりや深さが実に豊かに語られている。その豊かさは、近年飛躍的に進展しつつある秋成伝記研究の成果を反映するものであると同時に、現代語訳と原文を巧みに使い分け、読みやすさを旨としながら原文の呼吸をも読者に伝えようとした、著者の配慮のたまものであろう。第五章には、「絆」を鍵語として、秋成の代表作『雨月物語』『春雨物語』の二書をめぐる作品論が展開される。（『上田秋成―絆としての文芸』 大阪大学出版会 二〇一二年二月刊 二五八頁 二〇〇〇円）

（おぎのき・ちか）